論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Association between the serum insulin-like growth factor-1 concentration in the first trimester of pregnancy and postpartum depression

和文タイトル：

妊娠初期における血清インスリン様成長因子-1の濃度と産後うつとの関連

ユニットセンター（UC）等名：　兵庫UC

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名：　Psychiatry and Clinical Neurosciences

年：2021　DOI：　10.1111/pcn.13200

筆頭著者名：　足立　祥

所属UC名：　兵庫UC

目的：

うつ病の患者は、血清インスリン様成長因子-1（IGF-1）濃度が高いことが知られているが、血清IGF-1レベルとうつ病の発症との経時的な関係は明らかでない。本研究では、エコチル調査で得られたデータを用いて、妊娠初期の血清IGF-1濃度と産後うつ病の発症との関連を検討した。

方法：

エコチル調査参加者のうち、妊娠初期に血清IGF-1の測定値と抑うつ尺度であるKessler 6 (K6)の結果が得られた8,791名を対象とした。抑うつ症状は、妊娠初期にはK6、出産後1か月にはエジンバラ産後うつ質問票（EPDS）によって評価し、妊娠初期の血清IGF-1値との関連を解析した。母親の年齢、体格、喫煙習慣、社会経済状態等の共変量に関するデータは、自己記入式の質問票をよって収集した。

結果：

妊娠初期には、血清IGF-1値と妊婦の抑うつとの関連は有意ではなかった。しかし、出産後1か月では、妊娠初期における血清IGF-1値が高かった母親ほどEPDSが13点以上の産後うつの発症率が低かった。血清IGF-1値を四分位で分けると最高濃度群の最低濃度群に対する発症オッズ比は0.48（95%信頼区間：0.30-0.79）と有意に低かった。EPDSが9点以上でみてもオッズ比は0.76（95%信頼区間：0.61-0.95）と有意であった。

考察：（研究の限界を含める）

妊娠初期の血清IGF-1値が高いと、出産後1か月の抑うつ症状の発症のリスクが低くなるという関連が示されたが、妊娠中の抑うつ症状との関連は有意ではなかった。研究の限界として、妊娠初期に血清IGF-1値を測定できたのはエコチル調査に参加した妊婦の10%弱にとどまることがあげられる。また、抑うつ状態の評価は自記式の質問票によること、IGF-1以外に抑うつ状態に関連するエストロゲン、コルチゾルなどのホルモンは測定していないことなどがあげられる。

結論：

妊娠初期に血清IGF-1値が高い妊婦は、低値の妊婦よりも産後うつの発症率が低かった。妊娠中の血清IGF-1高値は、産後うつの発症予防に関連している可能性が示された。